

#### (4) 発達障害児支援に携わる公立小・中学校教職員の実態

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 博士課程 小谷 怜奈

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 田口 豊郁

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 博士課程 谷原 弘之

#### 【要旨】

A 県内3市2町において発達障害児支援に携わる公立小・中学校教職員の実態に関する調査を行った。調査の目的は、特別支援教育の導入による、発達障害児の地域援助における「学校」の位置づけを明確化し、教職員のサポート体制を確立するための現状把握であった。なお、調査には、既存の「職業性ストレス簡易調査票」及び自由記述による業務分析シートを用い、文献既知の方法に従って分析を行った。

調査の結果、発達障害児支援に携わる学校教職員は、仕事の量的負担・質的負担・身体的負担と自己の適性を職務遂行上のストレス要因として感じていることが明らかとなった。これらの要因によって生じる自覚的なストレス反応(活気の欠如、イライラ感、疲労感、不安感、抑うつ感、身体愁訴の6項目)の表出傾向についてクラスター分析を行ったところ、5つのクラスターに分類された。各クラスターは、ストレス要因に対して外的反応を示す①イライラ群(第1クラスター, n=16)、②肉体疲労群(第2クラスター, n=10)と内的反応を示す③不安群(第4クラスター, n=16)、④抑うつ群(第5クラスター, n=13)及び、⑤ストレス反応の表出程度が軽微な群(第3クラスター, n=19)であると要約できた。

また、上記のクラスターに属する教職員の、外部機関に対する要望を整理すると、ストレス要因に対して外的反応を示す傾向のある第1・第2クラスターにおいては、人的環境の充実や外部機関への学校業務の分担、発達障害児支援マニュアルの作成等、第3者による学校全体へのサポートの必要性が挙げられたのに対し、ストレス要因に対して内的反応を示す傾向のある第4・第5クラスターにおいては、自己の教育活動に対する理解や第3者による対人面の改善が挙げられた。さらに、第1・第2クラスターにおいては、発達障害児の支援中に、叱責や身体・行動抑制といった不適切な対応(心理的事故・ヒヤリハット)がしばしば見られ、教育的対応の困難が強く訴えられた。

本調査により、発達障害児支援に携わる教職員のストレス反応の表出傾向と、外部機関に対する要望や心理的事故・ヒヤリハットの発生の間に関連性が示唆された。公立小・中学校教職員が健全な姿勢で発達障害児支援に携わることが可能となるよう、特別支援教育の推進と並行して、教職員のニーズに応じたサポート体制が検討されるとともに、メンタルヘルスクエアに対する意識が高まることが求められるであろうと考える。